



An outbreak of *Serratia marcescens* in two neonatal intensive care units.

• J Hosp Infect. 2000 Dec;46(4):314-9.

Jones BL, Gorman EJ, Simpson J, Curran ET, McNamee S, Lucas C, Michie J, Platt DJ, Thakker B. Department of Clinical Microbiology, Glasgow Royal Infirmary, Glasgow G4 0SF, Scotland.

呼吸器回路加熱消毒

呼吸器回路加熱消毒



An outbreak of *Bacillus cereus* respiratory tract infections on a neonatal unit due to contaminated ventilator circuits.

• J Hosp Infect. 1999 Jan;41(1):19-22.

Gray J, George RH, Durbin GM, Ewer AK, Hocking MD, Morgan ME. Department of Microbiology, Birmingham Women's Hospital, Edgbaston, UK.

呼吸器回路加熱消毒

呼吸器回路加熱消毒



An outbreak of *M. serotype 1* group A Streptococcus in a neonatal intensive care unit.

• J Pediatr. 1996 Sep;129(3):396-402.

Campbell JR, Arango CA, Garcia-Prats JA, Baker CJ. Department of Pediatrics, Baylor College of Medicine, Houston, Texas 77030, USA.

呼吸器回路加熱消毒

隔離(キャリアも)、駆除



Enterobacter aerogenes outbreak in a neonatal intensive care unit.

• Pediatr Int. 1999 Apr;41(2):157-61.

Laiwal V, Kumar A, Gupta P, Gomber S, Ramachandran VG.

Department of Pediatrics, University College of Medical Sciences, Shahdara, Delhi, India.

呼吸器回路加熱消毒

呼吸器回路加熱消毒



Outbreak of *Bacillus cereus* infections in a neonatal intensive care unit traced to balloons used in manual ventilation.

• J Clin Microbiol. 2000 Nov;38(11):4131-6.

Van Der Zwet WC, Parleyliet GA, Savelkoul PH, Stoof J, Kaiser AM, Van Furth AM, Vandebroucke-Grauls CM. Departments of Medical Microbiology and Infection Control, University Hospital Vrije Universiteit, Amsterdam, The Netherlands.

呼吸器回路加熱消毒

呼吸器回路加熱消毒



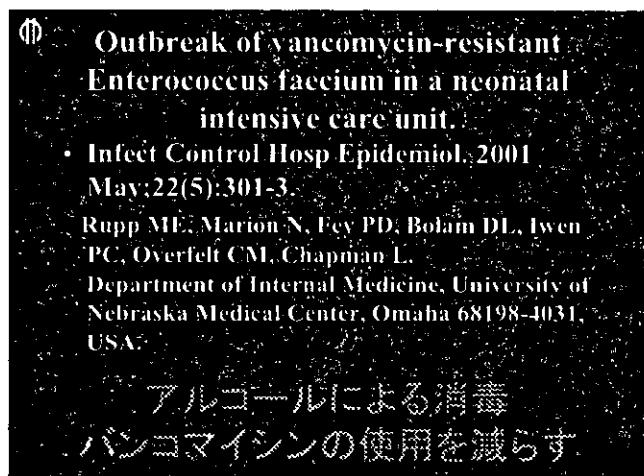
Outbreak of *Acinetobacter* spp. bloodstream infections in a nursery associated with contaminated aerosols and air conditioners.

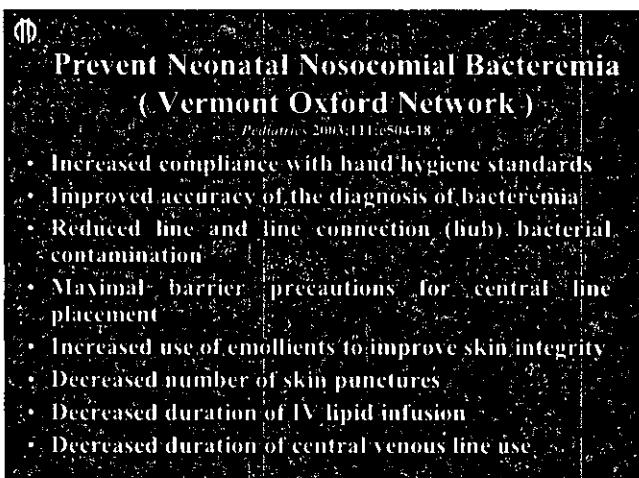
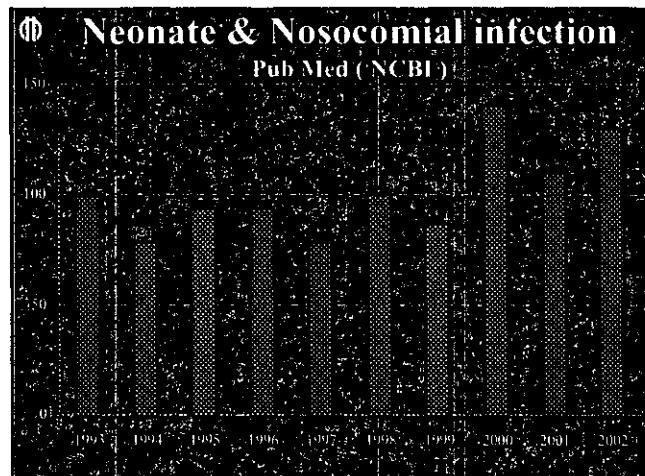
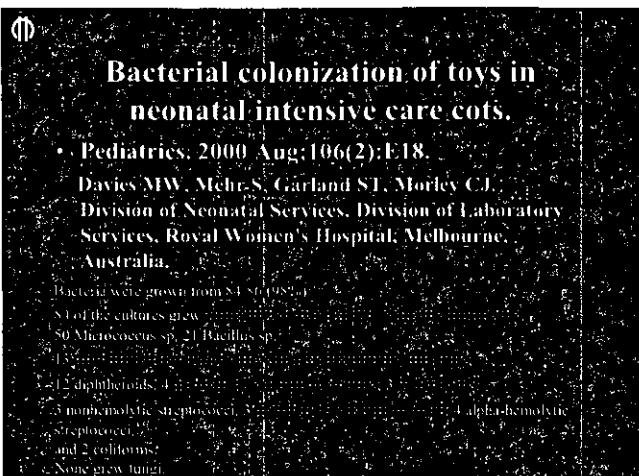
• Pediatr Infect Dis J. 1998 Aug;17(8):716-22.

McDonald LC, Walker M, Carson L, Arduino M, Aguero SM, Gomez P, McNeil P, Jarvis WR. Hospital Infection Program, Centers for Disease Control and Prevention, Atlanta, GA 30333, USA.

呼吸器回路加熱消毒

呼吸器回路加熱消毒





腎障害患者における バンコマイシン血中濃度測定の必要性

船橋市立医療センター救命救急センター
麻酔科集中治療科 境田 康二

はじめに

- MRSAを原因とする感染症に対して腎不全患者でもバンコマイシン投与を余儀なくされる症例が増加している
- 腎不全患者ではバンコマイシンの投与量を減らすことは言われているが、持続濾過透析(CHDF)を行なっている患者ではどうすべきか？
- 副作用を懸念することなくバンコマイシン投与を行なうには血中濃度に基づき、今後の血中濃度の推移を予測して、投与量を決めていくことが必要ではないか？

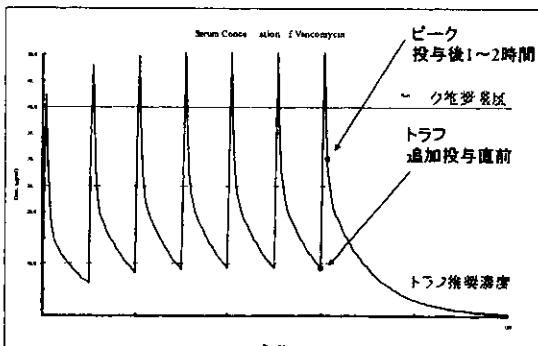
方法

- 腎機能正常患者、CHDF(持続濾過透析)
施行患者で、
VCM投与直前
投与1時間後の血中濃度を測定
- この値をもとに
VCM-TDM on Excel Ver 2.03の
解析ソフトで薬物動態のシミュレーション
を実施し、VCMの投与計画を実施。

VCMの推奨濃度

- トラフ $10 \mu\text{g}/\text{ml}$
追加投与直前に、この濃度を下回れば、
腎障害の可能性は低くなる
- ピーク(1~2時間後) $25 \sim 40 \mu\text{g}/\text{ml}$
追加投与後でこの濃度内であれば、
聴覚神経障害の可能性は低くなる

腎機能正常患者 VCM 1g/12時間毎の投与



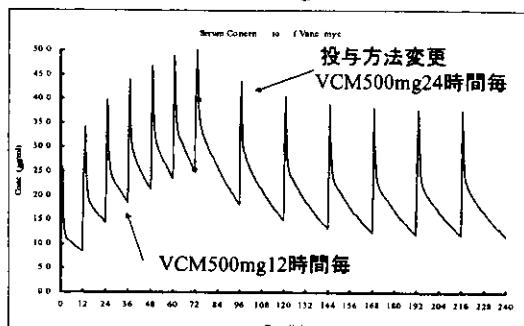
ピーク、トラフとも推奨濃度に収まっている

CHDF実施患者1

- 61歳、女性、多発外傷による腎不全状態 (Cre 157、無尿)
- VCMはVCM500mgを12時間毎の投与
- 結果
トラフ $25.4 \mu\text{g}/\text{ml}$ 、ピーク $39.7 \mu\text{g}/\text{ml}$
→トラフが高いので投与方法の変更が必要
→VCMの投与方法を
500mgを24時間ごとにすれば、シミュレーション
結果より推奨濃度内に入ってくる

CHDF実施患者1

Cre1 57、無尿、VCM500mgを12時間毎の投与



CHDF実施患者2

■ 71歳、男性、急性膀胱炎による腎不全状態
(Cre 183、無尿)

■ VCMはVCM500mgを8時間毎の投与

■ 結果

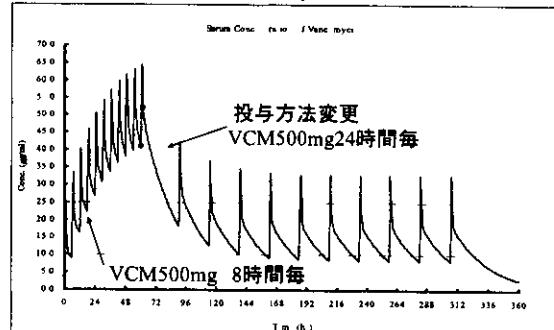
トラフ $41 \mu\text{g}/\text{ml}$ 、ピーク $52 \mu\text{g}/\text{ml}$

→トラフ、ピークとも高いので投与方法の変更が必要
→VCMの投与方法を

500mgを24時間ごとにすれば、シミュレーション結果より推奨濃度内に入ってくる
予測トラフ $8 \mu\text{g}/\text{ml}$ 、予測ピーク $20 \mu\text{g}/\text{ml}$

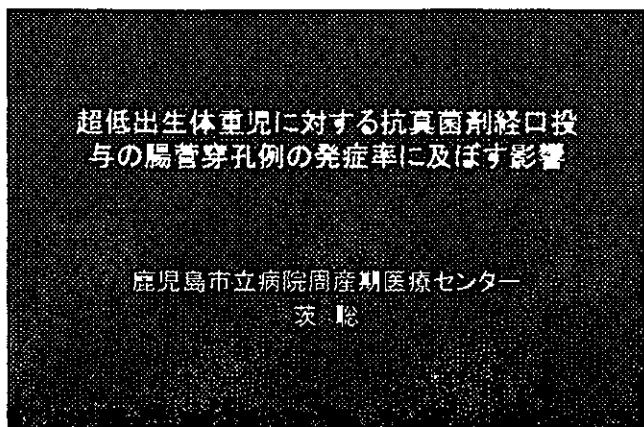
CHDF実施患者2

Cre1 83、無尿、VCM500mgを8時間毎の投与



結語

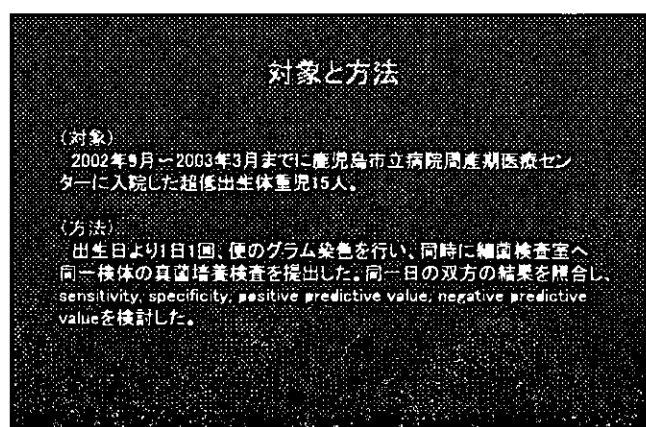
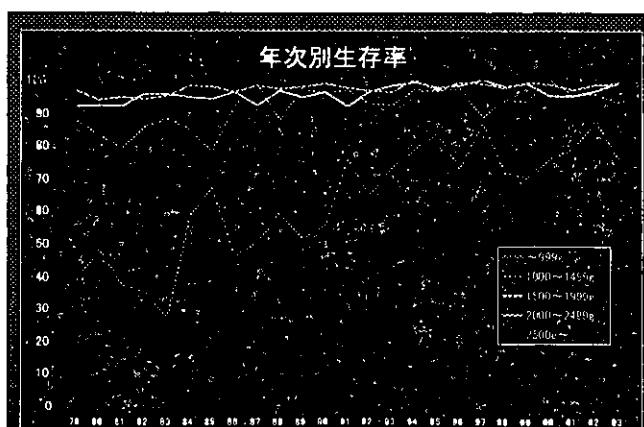
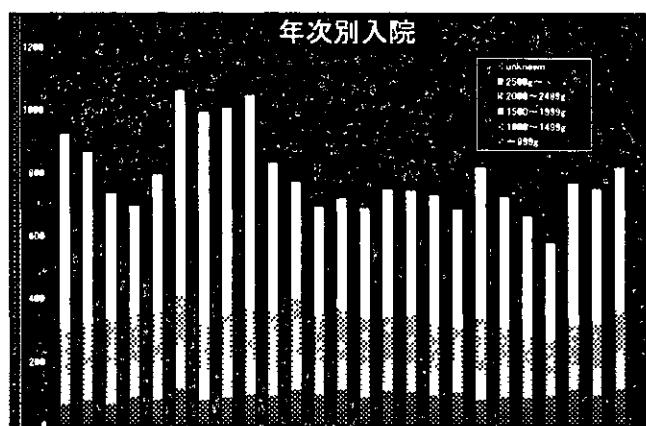
■ 腎不全によるCHDF施行患者において副作用の合併を抑えながら、安全にバンコマイシンを使用するためには、血中濃度(ピーク、トラフ)から薬物動態解析を行い、投与量を適宜、変更することにより適正な抗生物質投与が可能となる。



緒言

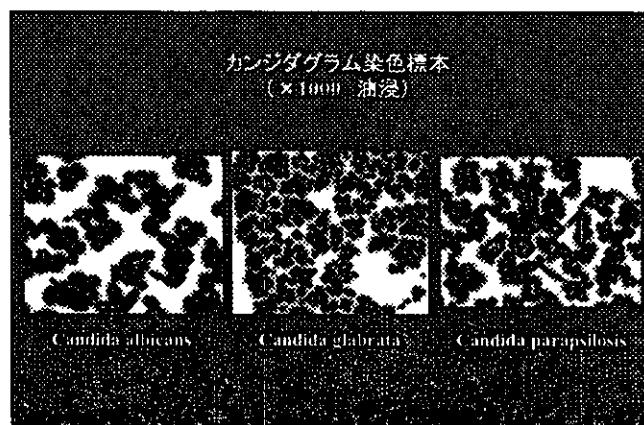
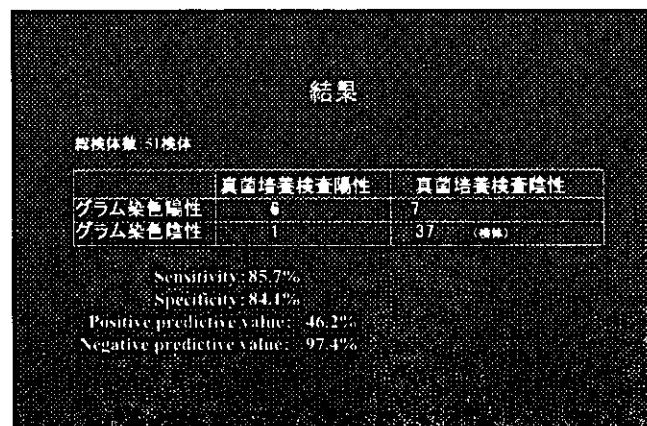
超低出生体重児の壊死性腸炎の起因菌としてクレブシエラ属などの細菌が報告されているが、近年、北米ではカンジダ腸炎を報告し、これまでの壊死性腸炎とは区別してクローズアップしている。カンジダ感染症の背景には未熟児のおかれている環境がカンジダの発育にとって好都合であることがあげられる。

カンジダ腸炎の診断において、ペッドサイドでの便のグラム染色による診断は、従来の真菌培養検査よりも早く治療に結びつけることができると言われているが、その信頼性に関する検討は少ない。そこで、便のグラム染色によるカンジダ腸炎の診断の精度を従来の真菌培養の結果と併合し、その感度および精度を検討した。



対象となった15症例						
症例	在胎週数	出生体重(g)	検出の部位	PRDM	分類方法	
1	24W3D	258	NHFS	—	Vaginal	
2	27W5D	434	子宮内膜炎	+	C/S	
3	24W4D	743	切迫早産	—	C/S	
4	29W2D	658	NHFS	—	C/S	
5	24W6D	606	切迫早産	—	Vaginal	
6	24W3D	728	重症妊娠中毒症	—	C/S	
7	26W3D	948	切迫早産	—	C/S	
8	29WOD	840	NHFS	—	C/S	
9	28WOD	664	切迫早産	—	C/S	
10	27W1D	566	切迫早産	—	C/S	
11	24W1D	120	切迫早産	+	Vaginal	
12	28W1D	766	NHFS	—	C/S	
13	26W3D	603	重症妊娠中毒症	—	C/S	
14	25W4D	858	切迫早産	—	Vaginal	
15	27W0D	978	切迫早産	—	C/S	

Ave. 26.7±1.8
NHFS: non-reassuring of fetal status

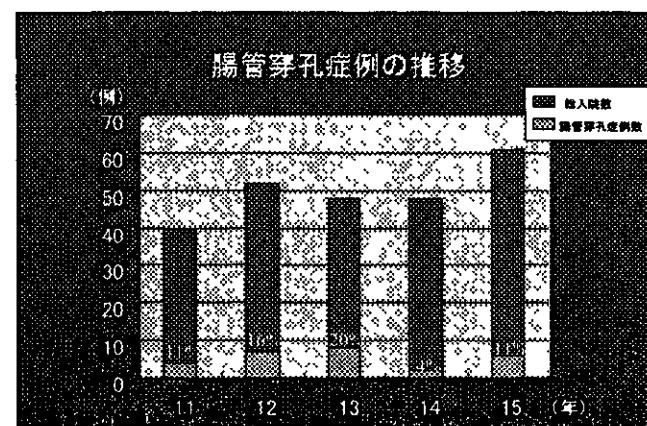


まとめ

(1) グラム染色と従来の真菌培養検査の結果を照合したところ、sensitivity: 85.7%, specificity: 84.1%, positive predictive value: 46.2%, negative predictive value: 97.4%であった。

(2) グラム染色の染色方法でアルコール脱色が不十分な場合、染色液の残りがカンジダ胞子と類似しており、false positiveと判断する場合が多く、またカンジダの種類によって芽胞の大きさが異なり、カンジダの判定には十分訓練を要することが明らかとなった。

(3) positive predictive value 46.2%, negative predictive value 97.4%であることは、この便のグラム染色によるカンジダ感染の診断は、抗真菌剤の過剰投与は存在するが、抗真菌剤の投与が手遅れになる症例は非常に少ないとから、カンジダ感染の予防・治療に有効である可能性が示唆された。



名古屋大学医学部附属病院NICUにおける 細菌分離状況の変化と 重症細菌感染症発症例の検討

名古屋大学医学部附属病院
周産母子センター新生児部門

早川 昌弘

Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital

目的

昨年度の本班会議においてH13,14年に
おける当院NICUの細菌分離状況を報告
した。

本年度はH15年の細菌分離状況に加えて
重症感染症を併発した症例についての
検討を行い、今後の感染対策の強化に
つなげることを目的とした。

Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital

方法

検討期間

平成15年1月1日～12月31日

検体採取部位

入院時検査:

皮膚擦過、胃液、(血液)

定期培養(週1回):

鼻腔粘液、便/皮膚擦過、(気管洗浄液)

Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital

結果

総入院患者数 190名

在胎期間: 37.3±3.9週 出生体重: 2577±759g

1回以上細菌培養を提出した患者数 103名

在胎期間: 35.9±3.8週 出生体重: 2268±846g

細菌検査の検体総数 1540検体

1種類以上の細菌が分離された検体の総数

1139検体

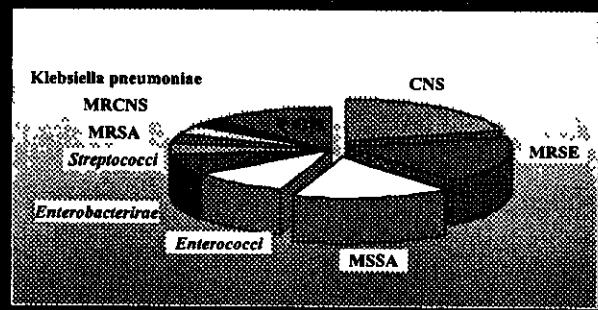
Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital

分離された菌種

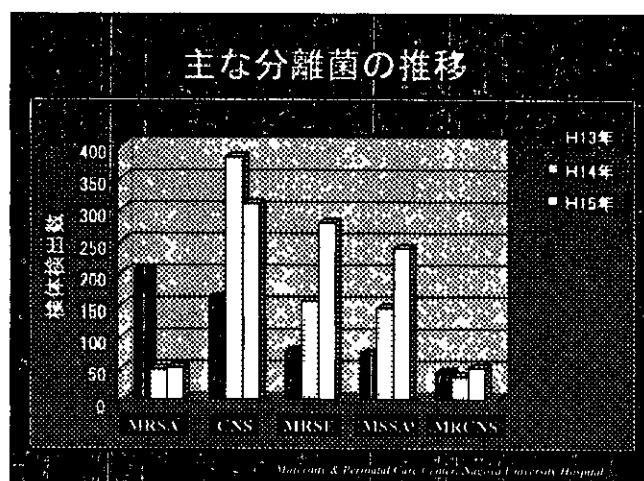
CNS	309
MRSE	279
MSSA	238
<i>Enterococci</i>	150
<i>Enterobacteriace</i>	117
<i>Streptococci</i>	72
MRSA	51
MRCNS	50
<i>K. pneumoniae</i>	45

Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital

各分離菌の割合



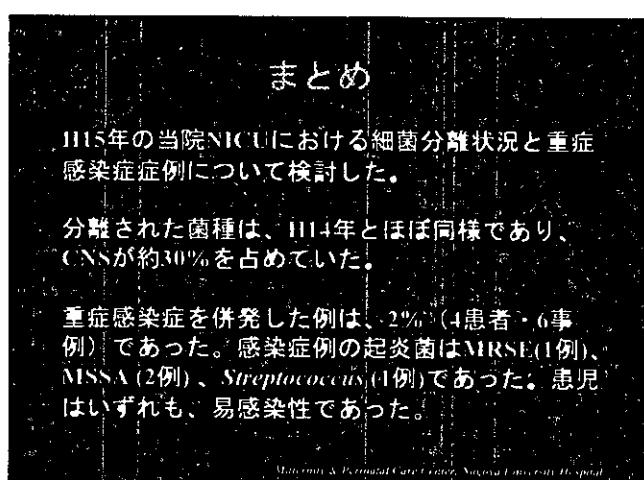
Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital

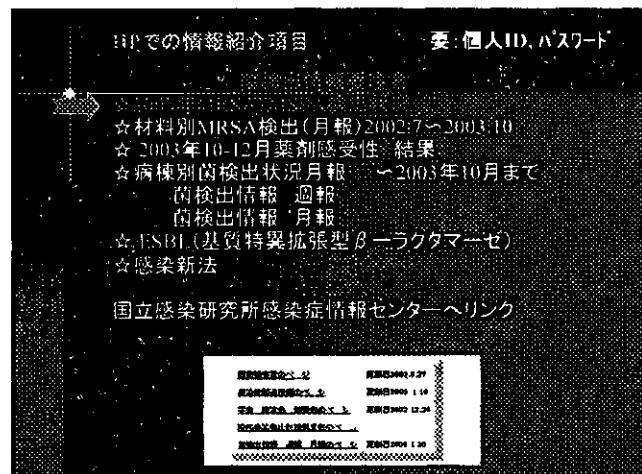
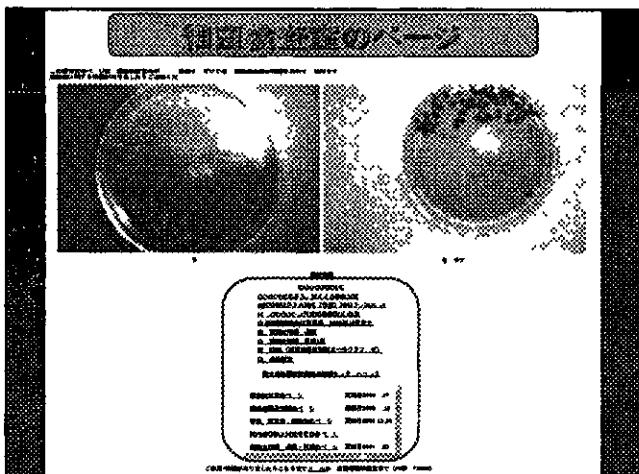
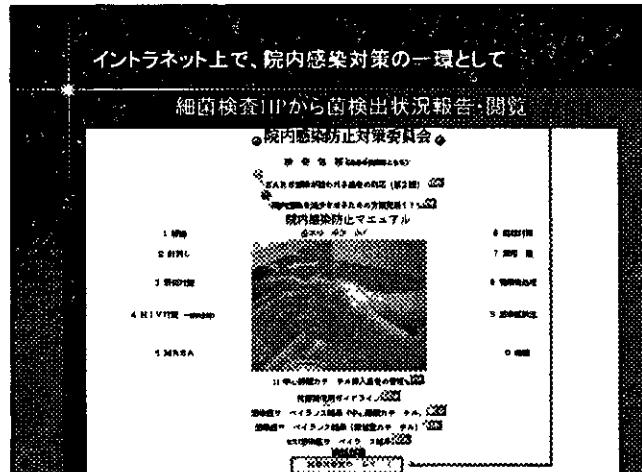
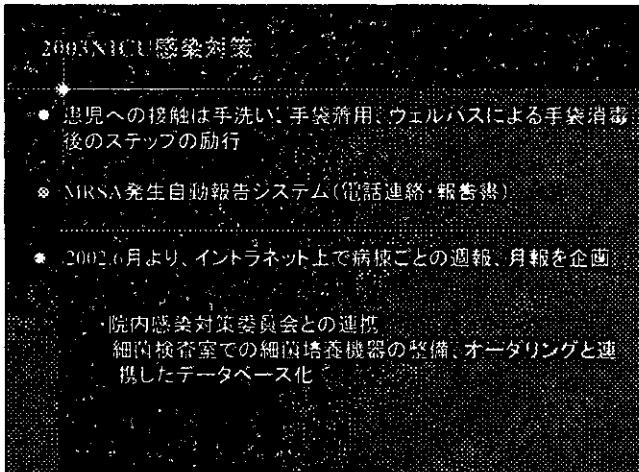
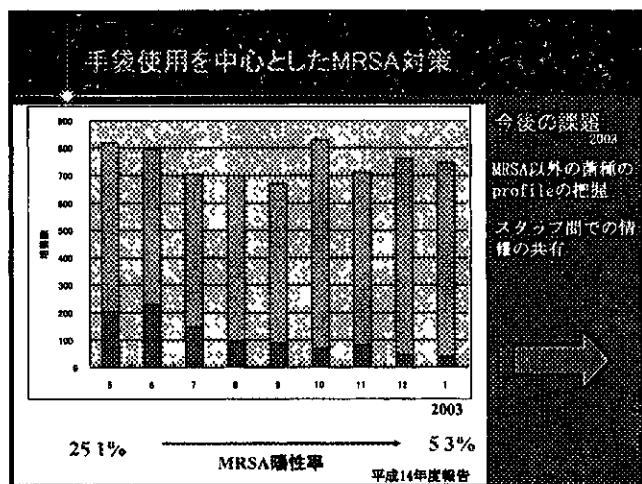
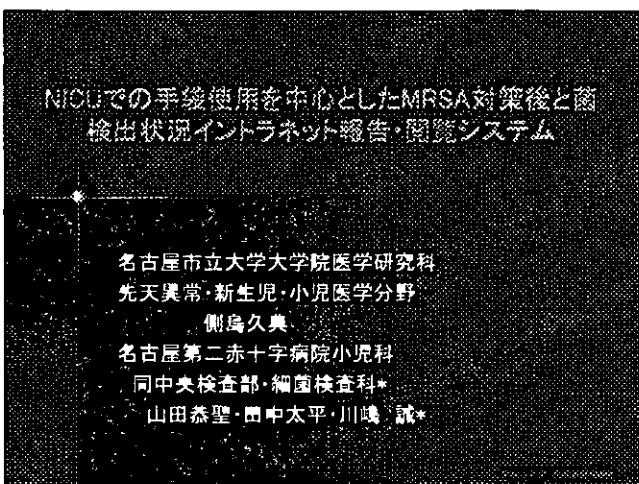


感染症発症例 (4患者・6事例)

GA	BW	PND	基礎疾患	感染部位	起炎菌
1. 23w0d	1656	215	PHHC	シャント	MRSE
2. 23w0d	1656	267	PHHC	UTI?	不明
3. 25w1d	594	25	PDA	カテーテル?	不明
4. 25w1d	594	68	PDA	気道感染	Strepto
5. 27w3d	1136	48	PHHC	菌血症	MSSA
6. 36w3d	2712	21	紅皮症	皮膚・菌血症	MRSA

Maternity & Perinatal Care Center, Nagoya University Hospital



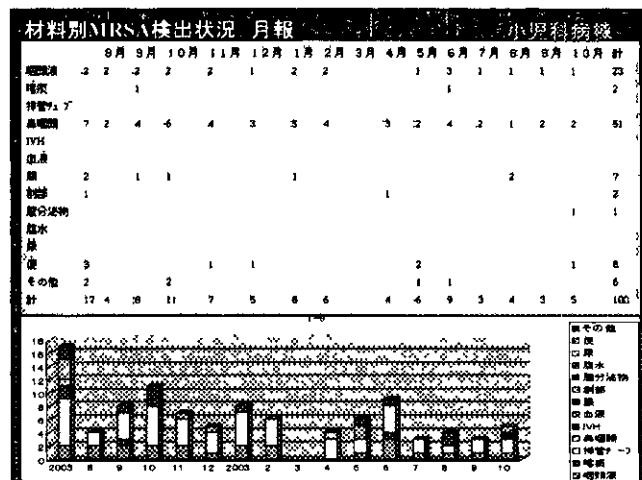
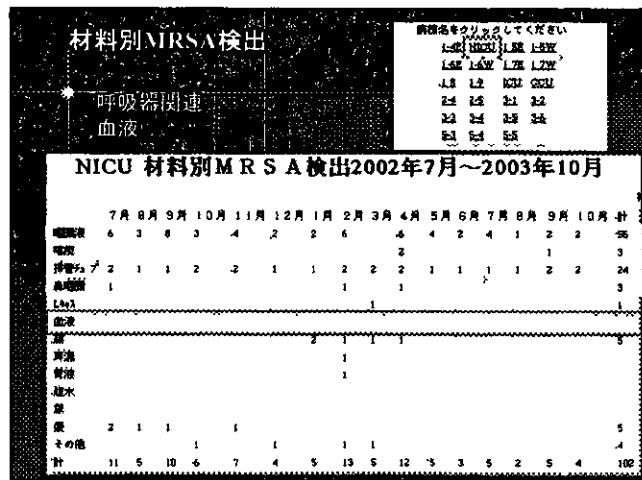
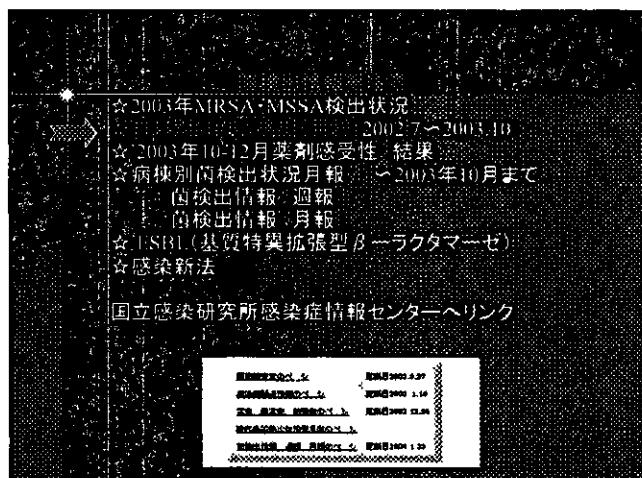
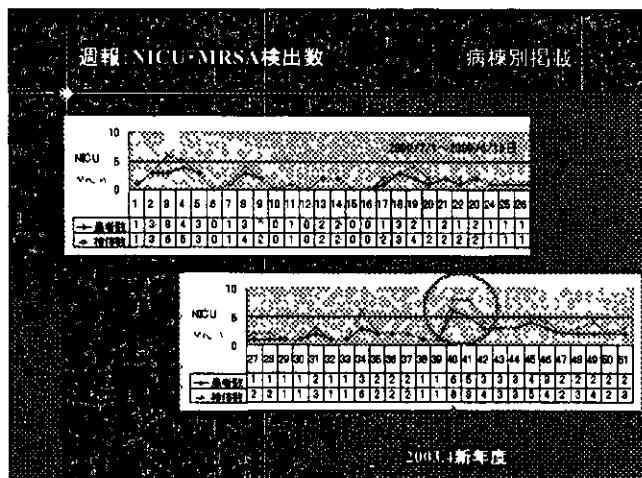
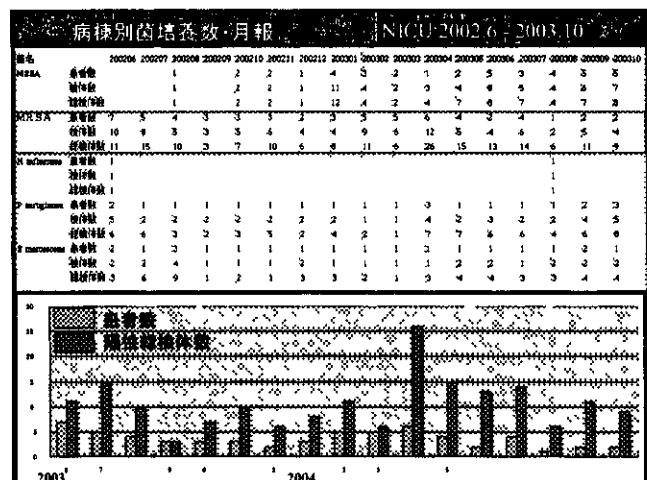


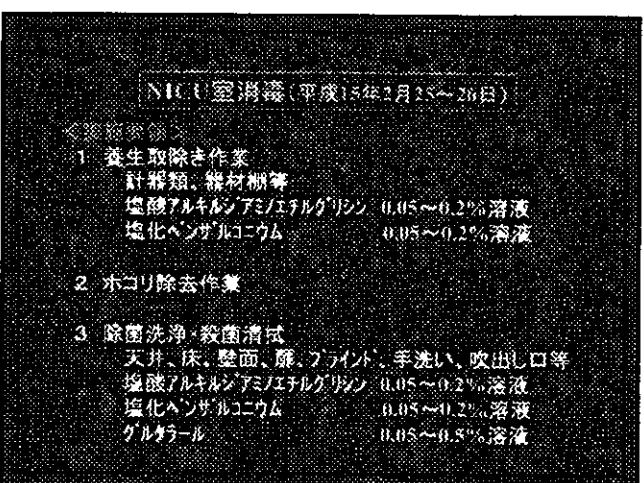
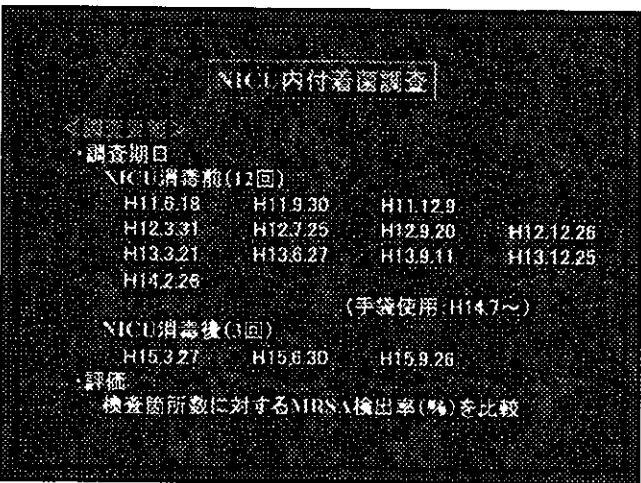
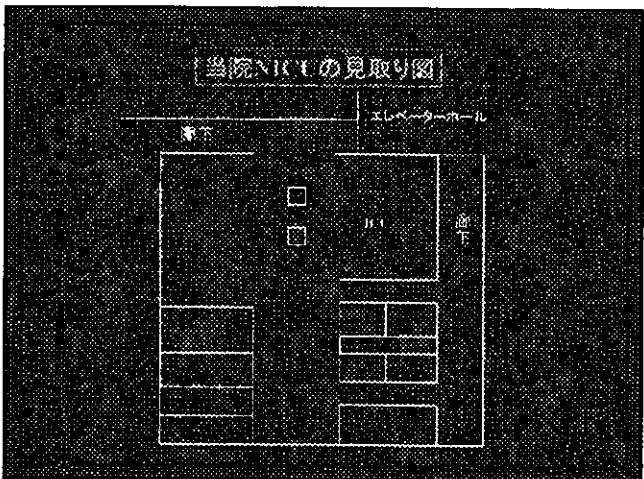
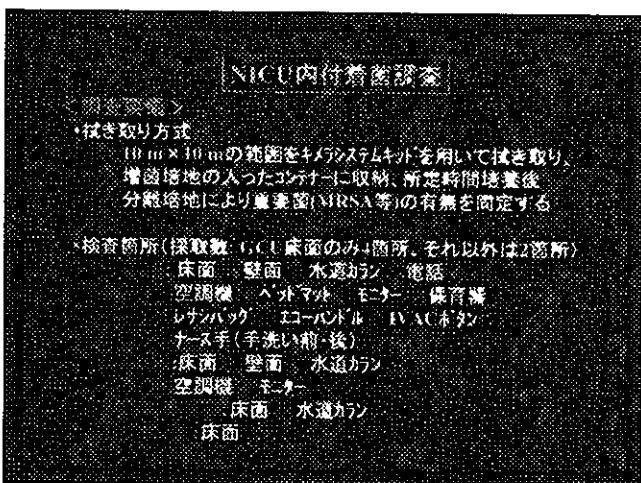
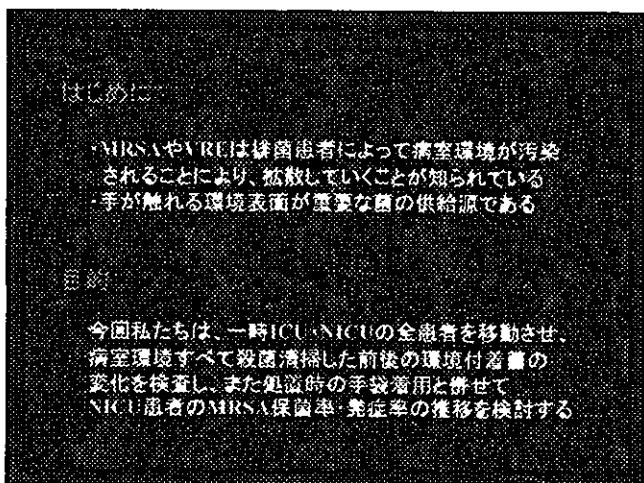
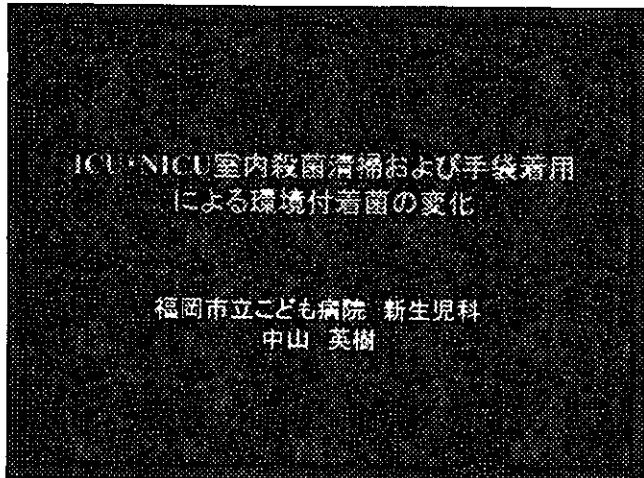
NICU 病棟菌月報

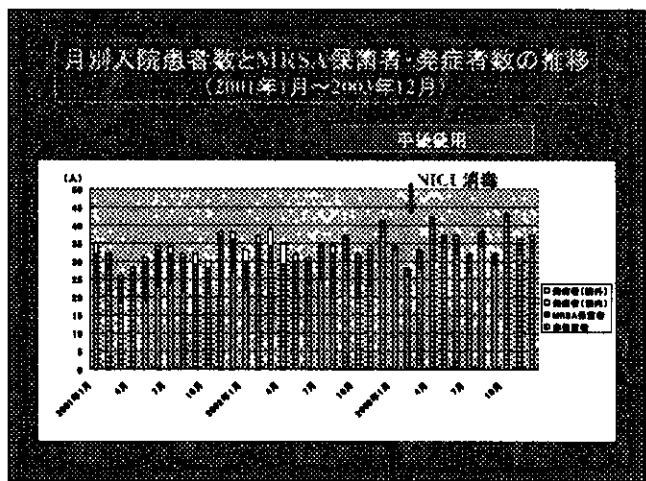
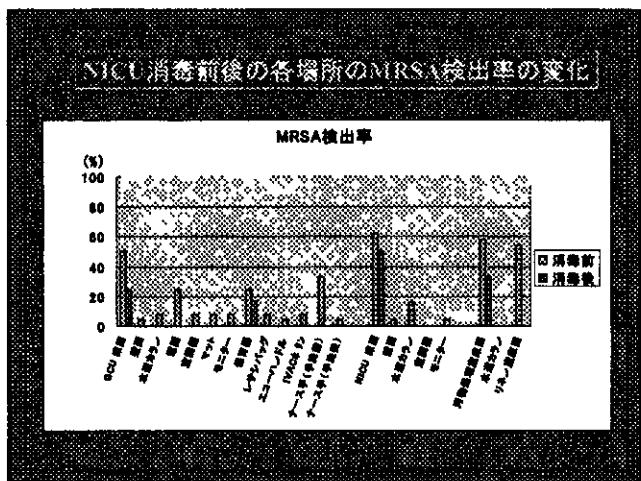
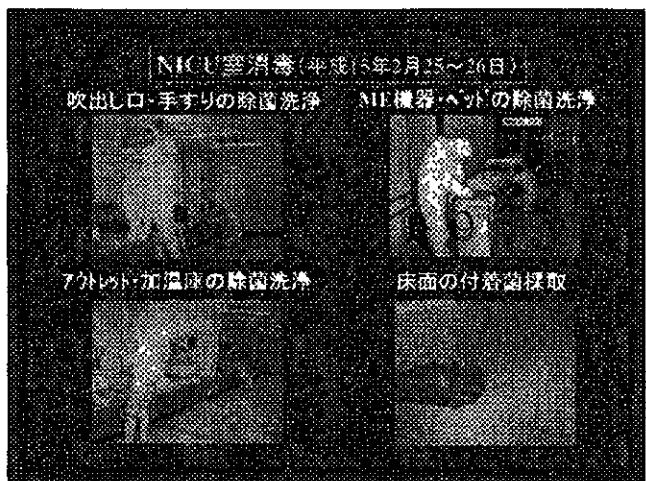
MSSA, MRSA, *Str. pyogenes*, *H.influenzae*,
P.aeruginosa, PRSP, PISP, *P.putida*, *S.intronaseus*

期間	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
NICU MSSA	4	3	2	1	2	5	3	4	8	5	11	4	50
MRSA	1	4	2	3	4	2	5	4	6	7	12	4	40
NICU MRSA	3	5	5	6	4	2	4	1	2	2	9	11	61
MRSA	4	9	6	12	5	4	6	2	3	4	11	13	56
NICU H.influenzae	1	1	1	3	1	1	1	1	2	2	1	1	10
H.influenzae	1	1	1	4	3	3	2	4	5	5	4	2	27
NICU P.aeruginosa	1	2	1	2	1	7	5	6	5	8	6	2	36
P.aeruginosa	2	1	1	4	3	3	2	4	5	5	4	2	26
NICU PRSP	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	10
PRSP	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	9
NICU PISP	1	2	1	3	4	4	3	3	4	4	5	2	30
PISP	1	2	1	3	4	4	3	3	4	4	5	2	28
NICU P.putida	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	10
P.putida	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	9
NICU S.intronaseus	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	10
S.intronaseus	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	9

菌検出情報・週報・月報
NICU病棟菌月報 2002.6～
MRSA患者数は1～2名(月)に減少。
検体総数は増加して、緑膿菌保有患児が増加傾向。
セラチアも消失していない。







結論

1. JCIのNICU病室環境の殺菌消毒薬剤後の環境付着菌の変化を検討したところ、床面からのMRSA検出率に変化はなかったが、他の環境面からの検出は減少した。
2. 手袋着用と併せてNICU患者のMRSA保菌率および発症率の推移を検討したところ、まず発症者が減少し、次いで保菌者も減少した。

出生直後のカンガルーケアがNICU入院児の細菌叢獲得に及ぼす影響

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院
周産期センター新生児部門
亀田佳哉

カンガルーケアとは

- 南米コロンビアのボゴタで始められた未熟児の保育法
- 未熟児を親が素肌に胸と胸を合わせるように直接抱く方法
- Skin to skin careともよばれる
- 親子に対して様々な効果があることが報告されている

カンガルーケアの赤ちゃんに対する効果

- 体温の維持
- 酸素化の維持
- 無呼吸発作の減少
- 心拍数変動の軽減
- 静睡眠と安静覚醒の増加など

カンガルーケアの母親に対する効果

- 母乳分泌を促進する
- 愛着形成をすすめる
- 退院後の不安を軽減するなど

目的

健康な妊娠婦の殆どは特有な健康細菌叢を有しており、満期産正常児は母親による抱擁、授乳などの日常的接触を介して健康細菌叢を獲得していく過程がある。しかし、NICUに入院する低出生体重児はいかなる手段を講じたとしても環境からの細菌叢を主としてNICU介護者の手によって獲得していく。すなわち、無症候性感染によって細菌叢を形成するともいえる。

一方、発達途上国ではskin to skin' care-programにより低出生体重児の感染症が減少することが知られている。そこで出生直後に低出生体重児をそのまま母親と皮膚接觸させ、母体皮膚の常在細菌を伝達させることを試み、低出生体重児の細菌叢形成に影響するかどうかを検討した。

方法1

対象は聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院で経産分娩にて出生した在胎28週から32週の早産児とした。

親権者の承諾が得られない児、もしくは医師が適応でないと判断した児は除外した。本学倫理委員会承認のもとに研究を行った。研究開始前に、インフォームドコンセントを行い、文書で同意を得た。

方法2

生後の処置終了後、母親の胸に裸のままの低出生体重児をのせ、児の安定した位置を確認して温めたバスタオルで覆い、モニターはパルスオキシメーターを足に貼付して行った(図1)。実施中は静かな環境を整え、そのまま、30分間見守り、異常と判断した場合や、母親が希望したら直ちに中止とした。

母親の新生児と接觸した部位の皮膚と入院後の新生児の細菌培養結果を比較し、母親の健常な常在細菌叢を獲得できたかどうかを検討した。



結果

平成14年5月から15年5月末までの期間に聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院で経産分娩にて出生し、親権者の承諾が得られた6名の早産児に対して研究を行った。

表1に対象となった患者背景を示した。一例のみ呼吸状態の悪化から、カンガルーケアが短時間となり、呼吸窮迫症候群のため人工換気を要したが、ほかは母親とともにゆったりとした時間が過ごせた。

表2に各患者の細菌培養結果を示した。MRSAのほかにNeisseriaやViridansなど細菌も検出されたが、今回の研究では感染症を発症した症例はなかった。

表1. 患者背景

症例	生後週数	出生体重	Apgar score	呼吸 呼吸器作 業実現率	カンガルーケア時間
1	21週4日	1392g	4点/6点	無呼吸发作 無実現率	1時間
2	29週3日	1178g	7点/8点	無呼吸发作 無実現率	30分钟
3	32週3日	1648g	6点/6点	TTN 無実現率	30分钟
4	29週3日	1474g	6点/6点	ABG 人工換気	5分钟
5	37週2日	1532g	9点/10点	無呼吸发作 無実現率	30分钟
6	29週8日	1140g	7点/8点	失代偿性 呼吸停止 N-CPAP	30分钟

表2. カンガルーケア後の細菌叢の動き

症例	1週目	2週目	3週目	4週目	5週目	6週目	7週目	8週目
1	-	-	-	-	-	-	-	-
2	-	-	-	-	-	-	-	-
3	-	-	-	-	-	-	-	-
4	-	-	-	-	-	-	-	-
5	-	-	-	-	-	-	-	-
6	-	-	-	-	-	-	-	-

表3. 非カンガルーケア群の細菌叢の動き

症例	1週目	2週目	3週目	4週目	5週目	6週目	7週目	8週目
1	-	-	-	-	-	-	-	-
2	-	-	-	-	-	-	-	-
3	-	-	-	-	-	-	-	-
4	-	-	-	-	-	-	-	-
5	-	-	-	-	-	-	-	-
6	-	-	-	-	-	-	-	-

考察

今回の研究では多數例の検討はできなかった。母体合併症や急速墜娩を要したため帝王切開による分娩が多く、経産分娩の症例が少なかった。しかし、6症例のなかでも生後早期に証明された細菌は生後2週間でも検出された。このことは出生直後に適切な細菌叢が形成されれば、NICUでの低出生体重児の院内感染予防となり得るものと考えられた。一例のみMRSAが早期から検出されたが、カンガルーケアが短時間しか行えなかった症例だった。母親から健常な細菌叢を得るには短時間ではなく、ある一定期間の皮膚接触が必要と推測される。生後1ヶ月でMRSAが検出された症例もみられるが、同時に健常な常在細菌も検出されており、MRSAによる感染症をおこすことなく経過した。

正常新生児において出産直後にカンガルーケアを行った母子の細菌叢は、ゲノムプロファイルが一致したと林らは報告している(第6回カンガルーケアミーティング)。新生児の常在菌叢の形成は早期に接觸した細菌ほど優性となることがブドウ球菌において報告されており、低出生体重児でも同様のことがおこっていると考えられた。

以上のことから出生直後の母体との皮膚接觸がNICUの院内感染予防対策の一部となる可能性があると思われた。しかし、母体の病原体 *C. albicans* が低出生体重児に証明された症例もみられた。また、新生児室でMRSA感染のoutbreak報告も散見されるようになり、母体の微生物学的モニターの重要性も再認識させられた。

今回の問題点

1. 帝王切開による分娩症例が多かった
・合併症妊娠や急速墜娩を要することが多い
・事前に承諾を得られない
・手術室での分娩のため母子の接觸が制限される
2. マンパワーの不足
・人員の補充がない
・臨床経験の少ない医師が多い